

る。本書に取り上げられている文献は、これまであまり紹介されていなかったものもあり、その意味では新しい手法を用いた検索法の意義が認められるといえよう。

このような18世紀のイギリスにおけるデンティスト乃至デンティストリーの状態を紹介したのち、現在のわが国の歯科医療の在りようについての考察を行い、いくつかの提言をしている。このことにより、著者がなぜ今、約300年前のイギリスの歯科医療について、分析を行ったかが明らかにされている。また、現在の著者の業務の中で取材した延べ数百カ所に上る歯科医療の現場から得たいくつかの知見が紹介されている。その意味で、18世紀のイギリスについての医史的な考察が、現在のわが国における歯科医療に対する提言に活かされているといつてよい。

最後に、感想と注文をつけておきたい。まず、多くの資料を駆使されている努力には敬服するが、その中のいくつかについて裏付けを取ってほしかったと思う。時空を超えた資料の跋渉から、

そのすべてに証拠を示すことは不可能と思われるが、ジャーナリストである著者であるが故に、敢えてこのことを求めたい。次に、第6章と第7章の間には、約300年の時間が流れており、その間にイギリスではどのように歯科医療が推移したのか、また、現在ならびに将来のわが国の状況について触れるのであれば、現在のイギリスの状況はどうなのか、著者の用いた方法を駆使すれば、18世紀の状況を把握するよりも容易ではないかと思われるので、次の機会に期待したい。最後に、著者は歯科医療について造詣が深いことはよくわかるけれども、二、三の歯科医学的な誤りが見受けられるのは残念である。本書の執筆にあたって歯科医師の意見を徴したのかどうか。もし、聞いたのであれば、そのことに触れていないのは如何なるものであろうか。

(宮武 光吉)

[日本歯科新聞社、〒101-0061 東京都千代田区三崎町2-20-4、TEL. 03(3234)2475、2010年7月、A5判、224頁、3,800円+税]

篠田達明 著

『日本史有名人の臨終図鑑 2』

篠田達明氏の精力的な著作活動には感心する。

本書は先にこの欄で紹介した同名の書の続編であり、第2弾である。前回と同じく、雑誌「歴史読本」に連載したものの集大成である点は変わりなく、総数70人の歴史上有名人の病歴カルテを公開するという形式をとっている。

名称も、入院患者が多くなったため、「れきどく」養生所から「れきどく」ホスピタルに昇格しているが、院長篠田氏である点は変わりなく、ただ一人で看護師兼、薬剤師兼、放射線技師兼、臨床検査技師兼、リハビリ療法士兼、介護福祉士兼、栄養士・調理師兼、その他もろもろを兼務して、病院のすべての仕事を切り回しておられるという設定は前と同じである。

表現には1人物ごとに見開き2ページをあて、

右ページは、主人公の死亡年齢とともに、生涯を短く簡潔に語っている。一方、左ページは全面枠組で、共通した様式をとっている。大別して上下二欄になっていて、上欄は保険証をもとに病院受付が記入する受診者欄であり、下欄は医師が記入する病歴病状欄である。受診者欄には、氏名・生年月日・出身地・現住所・診療日・父母・職業など。病状欄はさらに分かれて、家族歴・既往歴・現病歴・現症・留意点および今後の方針・臨床診断名・担当医名の欄が設けられている。一見して明快、興味のある欄を見ればよい。担当医欄には、実際に治療にあたった医師がわかっている場合はその名前、それと必ず著者篠田氏の名前が併列されていて、他医の診断にとらわれず著者自身独自の見解を述べている点は好感が持てる。

今回対象となった70名の年齢別分類では、30代までに亡くなった人々10名、40・50台で亡くなった人々18人、60代で亡くなった人々16人、70～90代で亡くなった人々17人、その他年齢不詳9人。職業はそれこそ全職種に及び、日本史上で有名な将軍、武将、政治家、作曲家、参謀、歌人、俳人、公卿、詩人、小説家、画家、さらにお化けなど架空の人物まで入っている。最近話題となっている時の人。浅井3姉妹（淀どの・お初・お江）、秋山兄弟（好古・真之）、岩崎弥太郎、和之宮なども漏れていない。

とくに筆者が力を注いでいるのは、将軍綱吉時代に起こった江戸城内松の廊下での刃傷事件の当事者、浅野内匠頭と吉良上野介である。ここでは徹底的に浅野方の非をならし、吉良方を擁護している。浅野内匠頭はもともと精神不安定の傾向があって、理由不明の凶行を行った、被害妄想による統合失調症か精神障害者の疑いがあり、精神鑑定を必要とするケースと断じ、大石良雄以下赤穂浪士なる暴力集団も、主君が上野介に殺害された事実もなく、ときの将軍綱吉から処罰されただけで、通常の仇討ちが成立しないのに、犯行仲間を集めて大挙して老人を襲い、殺害したあげく首を槍先にかかげて江戸の町を歩き回るなど日本犯罪史上まれに見る凶悪かつ計画的犯行を犯したものである。それにもかかわらず、この犯罪事件が題材となって庶民受けの大芝居に作り上げられたため、評判になって、迷惑をこうむったのは上野介の領地愛知県の吉良町の人々であり、理不尽な芝居のせいでいまだに泣いている。上野介の命日に「おいたわしや、吉良の殿様」と手を合わせ、

その不運を吊っているのを知っているかと怒りをブチまけている。

上野介のカルテだけは応急処置にあたった栗崎道有の日記から、額と背部の切傷処置の次第で埋められていて、他の死亡診断書の形式とは異なっている。

これらは著者が愛知県出身であることと関連がありそうだ。

本書は書名に臨終図鑑と題しながら、死因名をあげるだけで、臨終場面の描写が案外に少ない。臨終場面があるのは明治以後の事例で、秋山真之（虫垂炎から腹膜炎）、岩崎弥太郎（胃がん）、秋山好古（糖尿病、心筋梗塞）など数は多くない。

むしろ各人につけられたマッチ箱大のイラストが面白い。臨終図鑑の名にふさわしいのはこちらの方かもしれない。主人公の一生、エピソードなどから組み立てたもので、必ずしも本文と一致しないところもあるが、本人の事績や死因をよく読み込んでそれをユーモラスに図案化している。これをじっと眺め、判じ物としてその意味を読み取るのも一興であろう。篠田氏の文のおもしろさと競っていて、永美ハルオさんの傑作。

本書は1と同じく、一般向きで、やや読み物的、医史的史料を求める人には不満を与えるかもしれない。

（杉浦 守邦）

[新人物往来社、〒102-0083 東京都千代田区麹町3-2 相互麹町第1ビル、TEL. 03 (3221) 6032。
1は2009年12月、A5判、255頁、1,600円+税
2は2010年5月、A5判、159頁、1,200円+税]